



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 526 回 真意が伝わらない…橋下市長

2013.5.26

大阪市長・橋下徹氏の「慰安婦問題や風俗店」の言動が、実に大きな波紋を広げた。誰もが思っていたことでも、ずーっとタブーだった話題だし、半ば公人という立場の、マスコミの寵児の発言でもあり、注目されない方が不思議な環境だった。橋下さんの発言の真意は何だったのか？慰安婦問題とは何か？日本という国、日本人のアイデンティティとは何だろう？…その賛否や正否は正に賛否両論、未だに論議が尽きないところである。敗戦国というコンプレックスに苛まれ続けた戦後 68 年間、民族としての誇りを脱ぎ捨てた日本人の自虐的感性は、その反動の如く「虚像なる物的繁栄」を享受してきた今、この日本に、大きな問題提起をしたことは、間違いない真実だと思っている。

今回の橋下発言で、小生、少し違った観点から改めて驚いた現象がある。一連の橋下発言を見ていて感じた事は、「**人が人に何かを伝える難しさ**」である。不適切な発言に関しては、本人も何度となく詫びていたが、全く伝わらない。しかも橋下さんの真意はどこ吹く風で、一部の刺激的言葉だけが独り歩きしている。面白がってはしゃぐマスコミの無教養な幼稚さは相変わらずだが、橋下氏本人も、国際的に、これだけ大きな反響になるとは、想定外だったと思う。

二つのもの間に立って、正確に情報のやり取りを仲介するためには、それ専用の規格が必要であり、IT の世界では、これを「**インターフェイス**」と言っている。コンピューターがユーザーに対して情報を表示する方式や、逆に、ユーザーが情報を入力するための方式を定めたものといえる。役割としては、情報交換の円滑化にあり、その規格を通せば、正反対の回答は出ない。

でも、人と人をつなぐインターフェイスには、規格がない。人間同志のインターフェイスは、まだまだ太古の昔と同レベルのまま。デジタル社会ではあるが、「人」社会は何とも不便であると言わざるを得ない。

いかに情報が早く、わかりやすく伝達されたとしても、それを受ける側の人間の思考に「バグ」や「エラー」があれば、伝わらない。人の情報の受け取り方は千差万別、十人十色であり、その人の教養、感性、思想や経験、育ちによっても、全く異なってしまう。つまり共用化されたインターフェイスは存在せず、「バグ」や「エラー」を自ら作り続けているのが「人」世界だと言える。それは、いかにインターフェイスがユニバーサル化されても、「こころ」がユニバーサルデザインされないと、「人の声、人の文字、人の顔」が見えてこないという、規格標準化できない、「人」世界独特の真理に起因すると思う。だから「話せばわかる」…とは、そう簡単な問題ではなく、実は大変難しい「至難の業」である。

今回の橋下発言は正に、このインターフェイスの不具合が大きな原因だったかもしれない。

参考:メルマガ「3分コンサル・お客様満足主義 108#334」